



4月から北5病棟に待望の保育士さんが来てくれました。保育士さん配置実現に向けご尽力頂いた多くの皆さんに感謝いたします。新しい保育士さんよろしくお願ひします。

<第106回 ほほえみの会>

初参加の方2人と高島先生、県立がんセンターの天野先生を含め10人の参加でした

- ▽ 4歳女の子、悪性リンパ腫。去年の夏に顔に斑点が出来、虫刺されと思っていた。総合病院でも虫刺されといわれたがどんどん大きくなっていった。不審に思いかかりつけの医師に子供病院を紹介してもらい病気がわかる。もっと早く子供病院を紹介してもらえばと悔やむ。
- ▽ 小学3年男の子、急性リンパ性白血病。東京に住んでいたが幼稚園の年長時に、「化学物質過敏症」と診断される。薬に敏感でアレルギーが出る。温泉に入ると体内の化学物質が放出されるということで家族で伊東に引っ越す。しばらく元気だったがこの冬インフルエンザで薬を使用したことから体調を崩し、鼻血が止まらず救急車でこども病院へ。そこで病気がわかる。治療に入ったが薬で脳症を起こし、治療を中断している。本人は治療の痛さに恐怖を覚えて悲観的になり家に帰りたと言っている。が一方で「生きたい」とも言っている。親が絶対に弱気になってはいけないと思っている。
- ▽ 1歳5ヶ月、ランゲルハンス細胞組織球症。治療法がまだ確立されていない中、新薬に期待したが良くない。毎日血小板の輸血、酸素も欠かせない。父親も落ち込む。兄弟2人とHLAも合っているので何とか骨髄移植にもっていきたい。個室に入り気の合う看護師さんで助かる。また、保母さんがいてくれるので相手をしてくれ、遊んだ様子など報告してくれるのでありがたい。

▽ 3歳半、急性リンパ性白血病。治療を始めてすぐに肺炎になり治療を中断。なぜうちの子が病気かという思いがまだある。5歳の姉が保育園に行きたくないと言い出す。ママをとられたという。加えて、意地悪な友達がいて弟は死んだか、とか平気で言う。どうしたらいいか。参加者からは、子供でも言っているいいことと悪いことがあることをわからせる必要がある。子供でも真剣に話しをすればわかる。といった意見がありました。

▽ こうした、子供たちの死ねとか死ぬとかという言葉はメディアの影響が大きいのではないかというお話ががんセンターの天野先生からありました。子供たちへのメディアの悪影響はアメリカで問題となり、日本の小児科学会でも今、問題となっているとのこと。病院内ですっとビデオを見ている子もいますが、テレビは空間認識を育てないとか、五感を育てないとも言われているようです。テレビに子守りを頼むと楽なのですが問題も出るようです。

▽ また、県立がんセンターでは4月から「チャイルドライフスペシャリスト (CLS)」が配置されたとのこと。子どもたちとその家族にとって病院生活がよりストレスのない環境になるように支援してくれるとのこと。日本ではまだ少ないようですが浜松医大にも配置されており、是非こども病院にも配置をお願いしたいところです。が、同じ県立病院ですので一緒に面倒を見ていただけないかという話も出ました。

▽ 患者兄弟の精神的不安定さなどは「兄弟児」として問題となっており、こうした兄弟が月に一度でもカウンセラーのもと、たまっているものを吐き出せる場所がほしい。こうした支援をがんセンターのCLSにお願いできないか。という話も出ました。また、がんセンターでは子供の面会制限がないため兄弟に医師が直接病気の話をするそうです。子ども病院でも希望があれば兄弟に話をしてくれるとのこと。

次回は 5月 9日(日) 11時からです

ほほえみの会 代表 池田恵一 TEL054-247-9560

E-mailアドレス k_likeda@yahoo.co.jp

ホームページ <http://www.geocities.jp/hohoeminokai/>